

町史編さんだより

第30回 ～『じげの宝』シリーズvol.18～

『個性を生かした地域づくり・安原地区』

地域の特徴や活動、行事、祭り、昔話、自慢などを紹介します。

【写真】自然景観が魅力の安原集落（全景）



▲現在も記録が続く「御日待帳」



▲閏講では演芸も披露されにぎやかに



▲戦後、農地解放が進み、住民総出で畑を開墾

2000年以上続く 「御日待講」

安原集落は、北東に津地、南西に下榎の各集落が連なり、日野川左岸の段丘に位置する山すその集落で、日野川との間に水田が広がっています。川沿いにJR伯備線、町道下黒坂線が並行し、右岸の国道180号からは、日野川に架かる安原橋を渡って集落に入ります。

集落では、「御日待講」が、毎年1月18日に、氏子年番による日待ち宿で開かれています。これは、地域の私たちの安全や健康、五穀豊穰を祈る神事で、2000年以上も前から延々と現在まで続いています。昔は三日三晩、宴が続き、みんながとことん語りあい、人々の

きずなが深まったといえます。その年の出来事などを記録した「御日待張」が、大切に保管継承されており、古くは文化6（1809）年の年号が見られるほか、絵なども描かれています。このほか、4年に一度の「閏講」も、にぎやかに続けられています。

葉たばこの栽培や 和牛飼育も盛んに

戦後、集落の山手を少し上がったところにみんなが雑木林を開墾し、2畝ほどの畑を整備。そこで葉タバコを栽培し、昭和36年には日野村（当時）一の成績を収めました。当時、葉たばこと並んで和牛飼育にも力を入れました。全戸が成牛2頭以上を飼い、和牛改良組合を結成し、力を合

わせて優良牛の改良に努め、品評会や子牛の競り市では好成绩を収めました。その実力を物語る表彰状やトロフィーが集会所に飾られています。安原地内には、牧畜の神様、荒神さんの社があり、毎年、荒神祭も開かれています。昔は、この日、安原集会所（当時は共同作業所）の前で、地区の品評会を開いたといい、今も牛をつなぐ鉄輪が残っています。しかし、盛んだった和牛飼育も、高齢化などに伴い、平成20年ごろには飼育農家が見られなくなりました。

桜の巨木やヒメボタルを 新たな観光名勝に

世帯・人口は、昭和35年22戸（120人）が、平成27年には18戸（56人）と小

さな集落ですが、まとまりが良く、夏祭りや運動会（グラウンド・ゴルフ大会）、敬老会なども開催しています。昭和62年には、老人会が地区を見下ろす林道沿いに桜を植樹。近年では、休耕畑にヒマワリを植えて迷路を作りました。

また、東向きで日当たりが良く、日野川沿いに開けた四季の景色が美しい環境に恵まれているといえます。特に、荒神さん社付近にある、花も木の形も良いという桜の巨木が自慢の一つ。また、夫婦のように寄り添う2本のシユロの古木、N字型に曲がった「ど根性栗の木」もあり、集落の上の杉林では、初夏に無数のヒメボタルが、まばゆいほどの光を放つといえます。目の前の日野川では、子どものころから川に親しみ、アユ釣り名人も育っています。「安原の自然を、観光名勝として、金持神社に訪れる人にも紹介したい」「集落はまとまりがよく、さまざまな行事や活動に取り組んできた。これが継続するような地域づくりをしたい」と、将来への思いが語られました。（松本利秋Ⅱ政治・行政・教育小委員会）

読んでみたらんかな～

職員が勝手に
スス×る1冊♪
"今読みたい本"が
見つかるかも!?



『あゆみんとスー』

廣川あゆみ 廣川進 著 / 主婦と生活者

My
favorite!



飯塚 愛香

徳島県の山深い集落で暮らす廣川さん一家。食べものは、自然農法で作った野菜や、山や川で獲ってきた野生動物。電気や機械は極力使わず、ガスにいたっては一切使わない。料理は全て薪ストーブ、お風呂は露天の五右衛門風呂。時短とは無縁の、手間ひまかけた田舎暮らし。命と向き合い、自然とともに生きる家族の物語です。

本の中で、あゆみさん（あゆみん）は言います。「命って、ほかの誰かの責任じゃないし、わたしのものでもない。狩猟生活でたくさんの命を奪って生きて初めて、わたしも大きな輪の中にいることを実感したの。」

生と死、食べること、生きること、本当の豊かさについて大きく価値観を揺さぶられ、深く考えさせられました。食べることは、生きること。これからの人生の指針になりそうな、この本に出会えたことに感謝したいです。

『サラダ記念日』

俵 万智 著 / 河出書房新社



濱岡 文香

授業で短歌を習った時には、難しくて苦手でした。でも、大人になってからよく歌集を手取るようになりました。

『サラダ記念日』は1987年に発行された俵万智さん初の歌集です。その後、驚異のベストセラーとなり、題名を覚えている方も多いのではないのでしょうか？

使われているのは、5・7・5・7・7の31文字。たったそれだけなのに、何気ない日常が俵さんの言葉によりくっきりと浮かびあがり、愛おしい瞬間に変わっています。

日本語の面白さや奥深さを感じつつ、切なかったり嬉しかったりさせられる恋愛小説のような1冊です。

「いつもより一分早く駅に着く 一分君のこと考える」

「エビフライ 君のしっぽと吾のしっぽ並べて出でて来し洋食屋」



飯塚 愛香 × 濱岡 文香

今回紹介してくれたのは、保育所と小中学校で学校司書として働くこの2人

本好きな子どもたち、大歓迎！

“図書館の守り人”

根雨小学校と黒坂小学校で学校司書をしています。どちらもパワフルな子たちばかりです。私もそのパワーに負けないよう、日々頑張っています。



新たな本と出会いたいなら…

図書館へ行こう♪

日野中学校とひのっこ保育所で図書の貸し出しや選書などを行っています。本の魅力が伝えられるよう、日々精進中です。よろしくお願いします。